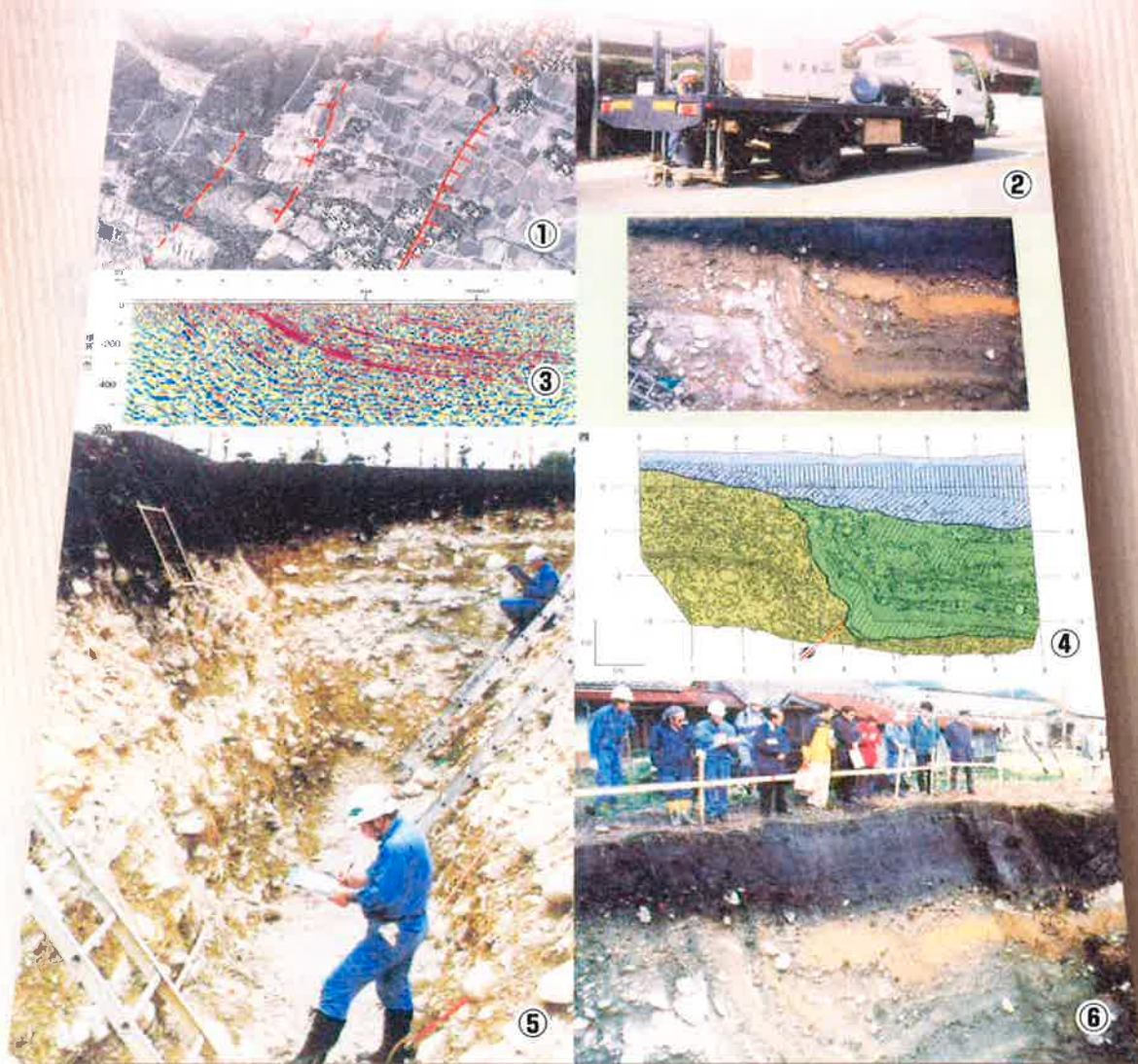


# 三重の活断層

活断層調査から わかったこと



# 5

## 三重県の活断層

三重県内には、北勢地域から中勢地域および伊賀地域にかけて、活断層が多く見られます。そのうち鈴鹿山脈や布引山地の東側には、活断層が最も集中しており、平野部との地形の境界に、南北方向に断層が連なっています。また、伊勢湾岸に近い平野部や伊勢湾の海底にも活断層が見られます。

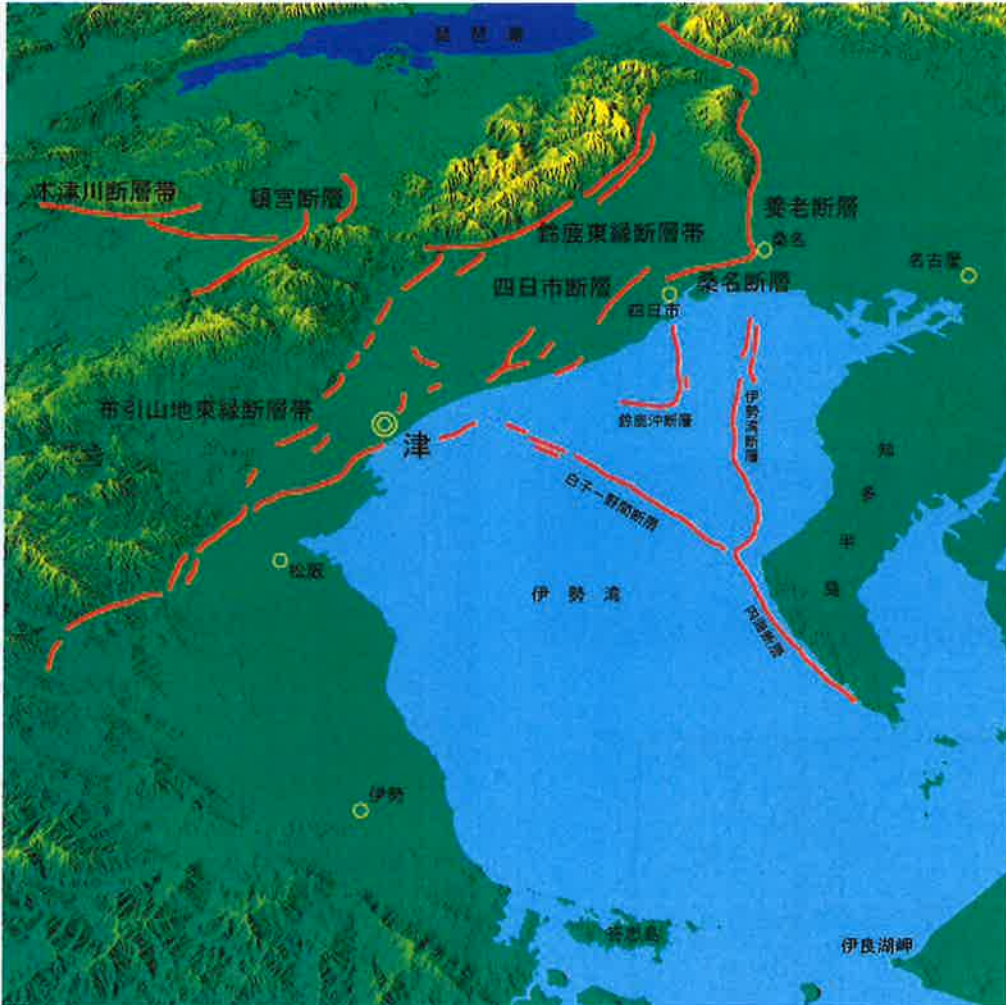
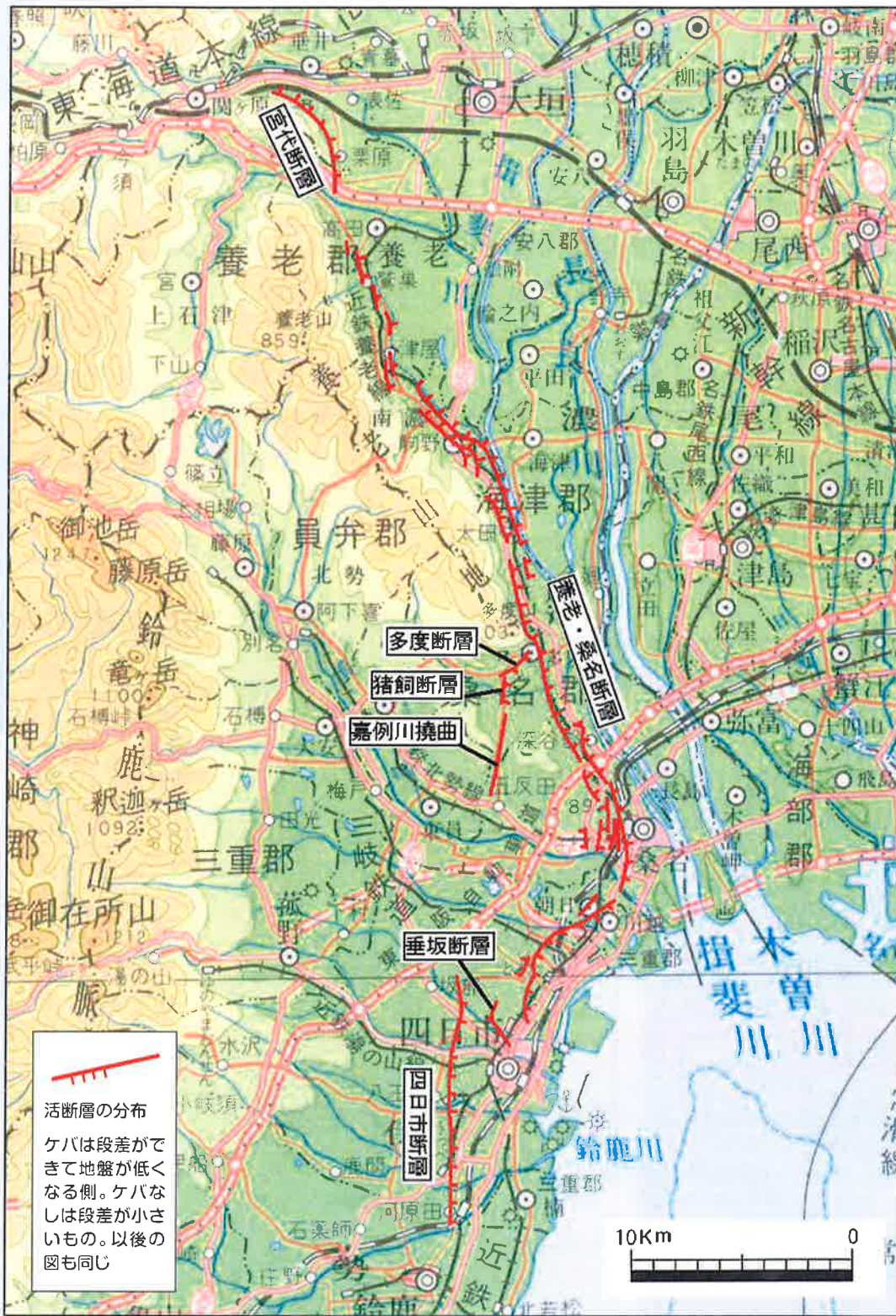


図-6 三重県周辺の主な活断層の分布 (国土地理院発行の数値地図50mメッシュ標高データ、および3Dソフトカシミールを使用) 養老断層、桑名断層、四日市断層をまとめて「養老-桑名-四日市断層帯」と呼んでいます。同様に、伊勢湾断層帯主部(北部の伊勢湾断層と南部の内海断層からなる)、白子-野間断層をまとめて「伊勢湾断層帯」と呼んでいます。

表-1 三重県内の主な活断層の概要 (政府の地震調査委員会による活断層の長期評価結果に基づき作成)

断層名	断層の長さ (km)	想定M	最新活動時期 (最も近い過去の大地震の証拠)	平均活動間隔	対応する可能性のある歴史地震	地震発生確率 (30年以内)	備考 (調査年度、調査機関)
養老-桑名-四日市断層帯	約60	8程度	13~16世紀 (一つ前の活動は、7世紀~11世紀)	1,400~1,900年 (過去5万年間の平均)		ほぼ0~0.7% (やや高いグループ)	H9~10 (国)
鈴鹿東縁断層帯	約34~47	7.5程度	約3,500年前~2,800年前	約6,500~12,000年		ほぼ0~0.07%	H7~8、H13~14 (県)
布引山地東縁断層帯	(西部) 約33 (東部) 約48	(西部) 7.4程度 (東部) 7.6程度	(西部) 約28,000年前~400年前以前 (東部) 11,000年前頃	(西部) 17,000年程度 (東部) 25,000年程度		(西部) ほぼ0~1% (やや高いグループ) (東部) 0.001%	H9~13 (県)
頓宮断層	約31	7.3程度	約10,000年前~7世紀	約10,000年以上		1%以下 (やや高いグループ)	H11 (国)
木津川断層帯	約31	7.3程度	1854年(安政元年)伊賀上野地震	約4,000~25,000年	1854年(安政元年)伊賀上野地震	ほぼ0%	H10~11 (国)
伊勢湾断層帯 (白子-野間断層)	約21	7.0程度	概ね6,500年前~5,000年前	8,000年程度		0.2~0.8% (やや高いグループ)	H7 (国)



地図中の地名等の表記は、平成17年3月時点

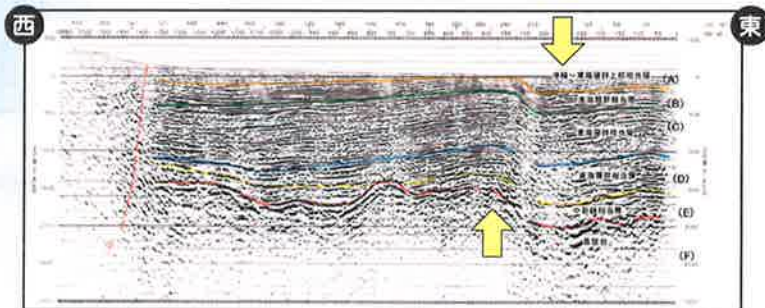


図-8 養老-桑名-四日市断層帯位置図  
 (断層の分布位置は政府の地震調査委員会の評価資料に基づく。以後の図も同様)。  
 下の図は、三重県による「平成15年度伊勢平野に関する地下構造調査」で明らかになった四日市断層付近の地下断面で、地層が歪んでいる様子がわかります。

# 5-2

## すすかとうえん 鈴鹿東縁断層帯

鈴鹿東縁断層帯は、岐阜県内から、三重県いなべ市、三重郡菰野町、四日市市、鈴鹿市を経て亀山市まで、鈴鹿山脈の東側に長さ約50kmにわたって分布しています。この断層帯については、三重県が平成7年度から詳しい調査を実施しており、断層の位置や最新の活動時期などが比較的良好にわかっています。平成13年度から平成14年度に実施した再調査では、約3,000年前に大地震を引き起こす活動があったことが明らかになりました。

この断層帯が活動すると、断層の近くでは強い揺れによって建物などが倒壊し、山沿いの斜面や台地のへりでは、崖崩れや落石などの斜面災害が発生する可能性があります。さらに山間地では、斜面災害によって道路が寸断され、孤立する集落が生じる可能性もあります。平地部でも道路の盛土などが崩れ、路面に段差などができる可能性があります。また、断層の近くの地域で、地表地震断層が地表に現れると、道路の路面に車両が通行できない程度の段差が生じる可能性があります。

### ◆形態

鈴鹿山脈とその東側の丘陵・台地との境界付近にある「境界断層」、それに平行して東側の丘陵東縁や段丘域内にある「前縁断層」、および両者の間にある数本の短い断層から構成される。

### ◆過去の活動

これまでの調査により、断層帯の北半分では、主に「前縁断層」、南半分では主に「境界断層」が、過去数万年間以上にわたって繰り返し活動してきたと考えられている。最新活動については、平成7年度の調査では、2万年前以降であることが確実となったが、平成13年度から平成14年度に再調査を行った結果、最新活動は約3,500年前以後、2,800年前以前である可能性が高いことがわかった。平均的な活動間隔については、約6,500～12,000年の可能性がある。

### ◆将来の活動

断層帯全体が一つの区間として活動した場合、マグニチュード7.5程度の地震が発生すると推定される。その際、断層の西側が東側に対して相対的に3～4m程度高まるすれや撓みが生じる可能性がある。



図-9 鈴鹿東縁断層帯の位置図  
地図中の地名等の表記は、平成17年3月時点